

受験番号		名 前	
------	--	-----	--

令和 8 年度 大阪市公立学校・幼稚園教員採用選考テスト

幼稚園 教科専門 問題集 (択一式)

受験中の心得

- 試験時間中は、すべて係員の指示に従ってください。お互いに話をしたり、席を立ったり、そのほか、人の迷惑になるようなことをしてはいけません。
- 試験開始後、まず名前を記入し、受験番号を次の〔記入例〕に従って黒くぬりつぶしてください。

〔記入例〕

解 答 用 紙

受験番号

A	9	B	8	C	7	D	6	E	5	F	0
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

名前

教育 花子

■

A	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	●
B	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	●	⑨ ⑩
C	①	②	③	④	⑤	⑥	●	⑧ ⑨ ⑩	
D	①	②	③	④	⑤	●	⑦ ⑧ ⑨ ⑩		
E	①	②	③	④	●	⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩			
F	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧ ⑨	●

- 答えは解答用紙に記入してください。
- 問題はいずれも五つの答えがでていますが、そのうち最も適切と思われる答えを一つ選んで、解答用紙の問題番号の右にある五つの数字のうち一つを次の〔解答例〕のように黒くぬりつぶしてください。

〔解答例〕

1

日本の首都はどこか。1～5から一つ選べ。

1

京都

2

奈良

3

東京

4

名古屋

5

大阪

この場合、正答は「3 東京」なので、解答用紙の問題番号1の

1

①

②

●

④

⑤

右横に並んでいる③を黒くぬりつぶしてください。

- 間違っぬりつぶしたときは、消しゴムでよく消してください。
- 問題は 20 問となっています。
- 時間は 70 分です。
- 途中退室はできません。
- 解答用紙は持ち帰ってはいけません。
- 計算を必要とする場合は問題集の余白を利用してください。

指示があるまで中をあけてはいけません。

- Ⅰ 次のア～オの各文は、[] に示される関係法規等を一部抜粋したものである。正しいもののみをすべてあげているものはどれか。1～5から一つ選べ。

[子ども・子育て支援法]

第一章 総則

- ア 第七条 2 この法律において「教育」とは、満三歳以上の小学校就学前子どもに対して義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして教育基本法（平成十八年法律第百二十号）第六条第一項に規定する法律に定める学校において行われる教育をいう。

[学校教育法施行規則]

第一章 総則 第三節 管理

- イ 第二十八条 ② 指導要録及びその写しのうち入学、卒業等の学籍に関する記録については、その保存期間は、永年とする。

[児童福祉法]

第一章 総則 第二節 定義

- ウ 第四条 この法律で、児童とは、満十五歳に満たない者をいい、児童を左のように分ける。
- 一 乳児 満三才に満たない者
 - 二 幼児 満三才から、小学校就学の始期に達するまでの者
 - 三 少年 小学校就学の始期から、満十五歳に達するまでの者

[学校保健安全法]

第二章 学校保健 第二節 健康相談等

- エ 第九条 養護教諭その他の職員は、相互に連携して、健康相談又は児童生徒等の健康状態の日常的な観察により、児童生徒等の心身の状況を把握し、健康上の問題があると認めるときは、遅滞なく、当該児童生徒等に対して必要な指導を行うとともに、必要に応じ、その保護者（学校教育法第十六条に規定する保護者をいう。第二十四条及び第三十条において同じ。）に対して必要な助言を行うものとする。

〔食育基本法〕

第一章 総則

オ 第五条

食育は、父母その他の保護者にあつては、家庭が食育において重要な役割を有していることを認識するとともに、子どもの教育、保育等を行う者にあつては、教育、保育等における食育の重要性を十分自覚し、積極的に子どもの食育の推進に関する活動に取り組むこととなるよう、行われなければならない。

1	ア	イ	ウ
2	ア	ウ	オ
3	ア	エ	オ
4	イ	ウ	エ
5	イ	エ	オ

- 2 次のア～オの各文は、「教育基本法」（平成18年 法律第120号）の記述を一部抜粋したものである。正しいものを○、誤っているものを×とした場合、正しい組合せはどれか。1～5から一つ選べ。

第二章 教育の実施に関する基本

- ア 第六条 2 学校においては、教育の目標が達成されるよう、教育を受ける者の心身の発達に応じて、体系的な教育が組織的に行われなければならない。
- イ 第九条 法律に定める学校の教員は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない。
- ウ 第十条 学校は、子の教育について第一義的責任を有するものであって、生活のために必要な習慣を身に付けさせるとともに、自立心を育成し、心身の調和のとれた発達を図るよう努めるものとする。
- エ 第十一条 幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであることにかんがみ、国及び地方公共団体は、幼児の健やかな成長に資する良好な環境の整備その他適当な方法によって、その振興に努めなければならない。
- オ 第十三条 学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力に努めるものとする。

	ア	イ	ウ	エ	オ
1	○	×	○	○	×
2	○	○	×	○	○
3	○	○	×	×	×
4	×	×	○	×	○
5	×	○	○	○	○

- 3 次のア～オの各文のうち、「幼稚園教育要領解説」（平成30年2月 文部科学省）「第1章第5節 2 海外から帰国した幼児等の幼稚園生活への適応」に関する記述の内容として、正しいもののみをすべてあげているものはどれか。1～5から一つ選べ。

ア 教師自身が、当該幼児が暮らしていた国の生活などに関心をもち、理解しようとする姿勢を保ち、一人一人の幼児の実情を把握すること、その上で、その幼児が教師によって受け入れられ、見守られているという安心感をもち、次第に自己を発揮できるよう配慮することが重要である。

イ 教師は、日本の生活習慣や行動様式に従って過ごさせたり、母語を使わず日本語で話すようにしたりして、より早期に日本の生活習慣を習得できるように関わることが重要である。

ウ 保護者は自身が経験した幼稚園のイメージをもっているため、日本の幼稚園との違いに戸惑ったり、受け入れられなかったりすることもある。したがって、園生活に関することは丁寧に説明するものの、園の方針を説明をする必要はない。

エ 様々な背景をもった幼児が生活を共にすることは、異なる習慣や行動様式をもった他の幼児と関わり、それを認め合う貴重な経験につながる。そのことは、幼児が一人一人の違いに気づき、それを受け入れたり、自他の存在について考えたりするよい機会にもなり得る。

オ 幼児期は、外見など自分にとって分かりやすい面にとらわれたり、相手の気持ちに構わずに感じたことを言ったりする傾向も見受けられる。教師は、そうした感情を受け止めつつも、一人一人がかかけがえのない存在であるということに気付くよう促していきたい。

- | | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | イ | エ | |
| 2 | イ | オ | |
| 3 | ウ | オ | |
| 4 | ア | エ | オ |
| 5 | イ | ウ | エ |

- 4 次のア～オの各文のうち、「幼稚園教育要領解説」（平成30年2月 文部科学省）「第1章第3節 教育課程の役割と編成等」に関する記述の内容として、正しいものを○、誤っているものを×とした場合、正しい組合せはどれか。1～5から一つ選べ。

ア 教育課程の編成や指導計画の作成においては、入園から修了まで幼児の生活する姿がどのように変容するかという発達の過程を捉え、発達の見通しをもつことが大切である。発達には個人差があり、様々な道筋があることはいうまでもないが、大筋でみると同じような道筋をたどるものである。

イ 入園当初においては、幼稚園生活がこれまでの生活と大きく異なるので、家庭との連携を緊密にすることによって、個々の幼児の生活に理解を深め、幼児が安心して幼稚園生活を送ることができるよう配慮することが必要である。このため、例えば、家庭のように安心できる雰囲気のある保育室の環境をつくることなどが考えられる。

ウ それぞれの幼稚園は、地域環境や幼稚園自体がもっている人的、物的条件が違っており、それぞれ異なった特色を有している。幼児の生活や発達はそのような条件に大きく影響を受けるものであるので、このような幼稚園や地域の実態を把握して、特色を生かし、創意のある教育課程を編成するとともに、その実施状況を評価し、改善を図る必要がある。

エ 幼稚園型認定こども園においては、一人の幼児について考えてみると、まず保育機能の施設に在籍し、その後幼稚園に入園することがある。この場合、家庭から幼稚園に入園する幼児とは異なった生活経験をしているが、その生活経験を生かした活動を展開する必要はない。

オ 小学校においては、幼稚園から小学校への移行を円滑にすることが求められる。低学年は、幼児期の教育を通じて身に付けたことを生かしながら教科等の学びにつながる時期であり、特に、入学当初においては、スタートカリキュラムを編成し、その中で、生活科を中心に合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定なども行われている。

	ア	イ	ウ	エ	オ
1	○	○	○	×	○
2	×	×	○	○	×
3	○	×	×	×	○
4	×	○	○	○	○
5	×	○	○	×	○

- 5 次のア～エの各文は、「幼稚園教育要領解説」（平成30年2月 文部科学省）「第1章第4節 指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価」に関する記述の一部である。正しいものを○、誤っているものを×とした場合、正しい組合せはどれか。1～5から一つ選べ。

ア 指導計画は、教育課程を具体化したものであり、具体化するには、一般に長期的な見通しをもった年、学期、月あるいは発達の時期などの長期の指導計画（年間指導計画等）とそれと関連してより具体的な幼児の生活に即して作成する週の指導計画（週案）や日の指導計画（日案）等の短期の指導計画の両方を考えることになる。

イ 長期の指導計画は、幼稚園生活の全体を視野に入れて作成する必要がある、全体を把握している園長のみが作成することとなっている。これに対して、短期の指導計画は、各学級の生活に応じた計画であることから、学級担任が自分の学級について原則として作成するものである。

ウ 指導計画を作成するには、一般に一人一人の発達の実情を踏まえながらも、その共通する部分や全体的な様相を手掛かりにして作成されることが多い。しかし、具体的な指導においては、一人一人の幼児が発達に必要な経験を得られるようにするために、個々の幼児の発達や内面の動きなどを的確に把握して、それぞれの幼児の興味や欲求を十分満足させるようにしなければならない。

エ 指導計画の作成においては、学級や学年の幼児たちがどのような時期にどのような道筋で発達しているかという発達の過程を理解することも必要になる。その際、幼児期はこれまでの生活経験により、発達の過程の違いが大きい時期であることに留意しなければならない。特に、3歳児では個人差が大きいので、一人一人の発達の特性としてこのような違いを踏まえて、指導計画に位置付けていくことが必要である。

	ア	イ	ウ	エ
1	×	○	○	○
2	×	○	○	×
3	×	×	×	○
4	○	×	○	○
5	○	×	○	×

- 6 次のア～エの各文のうち、「幼稚園教育要領解説」（平成30年2月 文部科学省）「第1章第6節 3 学校間の交流や障害のある幼児との活動を共にする機会」に関する記述の内容として、正しいもののみをすべてあげているものはどれか。1～5から一つ選べ。

ア 地域や幼稚園の実態等により、幼稚園間に加え、保育所、幼保連携型認定こども園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校などとの間の連携や交流を図るものとする。特に、幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続のため、幼稚園の幼児と小学校の児童との交流の機会を積極的に設けるようにするものとする。

イ 交流活動を意義あるものとするには、相互のねらいや方法などを踏まえ、事前の打ち合わせを行い、相互の連携を図りながら取り組むことが大切である。ただし、相互の教育活動を優先し、単発的な取組にすることが望ましい。

ウ 幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続のためには、保育参観や授業参観を通じて、教師同士がお互いの教育内容等について相互に理解できるよう、幼稚園と小学校が組織的に連携することが大切である。

エ 生活科の授業で小学生が幼稚園を訪問し、入学してからできるようになったことを幼児に話して聞かせたり、幼児が小学校に出掛けて高学年の児童と一緒に給食を食べたりするなどの機会をもつことによって、幼児は児童に憧れの気持ちをもったり、小学校生活に期待を寄せたりすることができる。

- | | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | ア | イ | |
| 2 | ウ | エ | |
| 3 | ア | イ | ウ |
| 4 | ア | ウ | エ |
| 5 | イ | ウ | エ |

- 7 次のア～エの各文のうち、「幼稚園教育要領解説」（平成30年2月 文部科学省）「第3章 教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動などの留意事項」に関する記述の内容として、正しいものを○、誤っているものを×とした場合、正しい組合せはどれか。1～5から一つ選べ。

ア 幼児の家庭や地域での生活を含め、生活全体を豊かにし、健やかな成長を確保していくためには、幼稚園が家庭や地域社会との連携を深め、地域の実態や保護者及び地域の人々の要請などを踏まえ、地域における幼児期の教育のセンターとしてその施設や機能を開放し、積極的に子育てを支援していく必要がある。

イ 子育ての支援活動の一環として園庭・園舎を開放している場合には利用している地域の人々の子育ての相談に応じることがある。園長のみが対応できることであり、地域の人々が安心して利用できるよう配慮しながら取り組んでいく。

ウ 教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動については、地域の実態や保護者の事情を考慮することが大切である。例えば、毎日希望する場合又は週の何日か希望する場合、あるいは、幼稚園の設定した終了時間よりも早く帰ることを希望する場合など様々なケースが考えられる。しかし、教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動のため、保護者の要請に応える必要はない。

エ 教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動は、家庭の教育力を損なうものであってはならない。そのため、保護者と幼児の様子等について情報交換などを行う中で、教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動の趣旨や家庭における教育の重要性を保護者に十分に理解してもらい、保護者が、幼稚園と共に幼児を育てるという意識が高まるようにすることが大切である。

	ア	イ	ウ	エ
1	○	×	×	○
2	×	×	○	×
3	○	○	×	×
4	○	×	○	○
5	×	○	×	○

- 8 次のア～オの各文は、「障害のある幼児と共に育つ生活の理解と指導」（令和5年3月 文部科学省 厚生労働省 内閣府）に関する記述の一部である。正しいものを○、誤っているものを×とした場合、正しい組合せはどれか。1～5から一つ選べ。

ア 園においては、障害のある幼児などに対して、必ず、特別の教育課程を編成し、個別の指導計画を作成します。障害のある幼児などは障害の状態等に細やかに対応した個別の指導計画の下、その幼児の興味や関心を生かしながら遊びが充実していくこと、その中で得意なことをさらに伸ばしたり、苦手なことに挑戦したりする体験が積み重なっていくことが重要です。

イ 障害の状態等を踏まえた必要な支援を考えていくには、まず、実態を適切に捉えることが重要です。その際、障害に関する専門的な視点から、その幼児の得意なことや苦手なこと、できることとできないこと、どのような状況で起こるのかななどを客観的に捉えるアセスメントが有効です。こうしたアセスメントはそれ自体を目的とすることなく、必要な支援を検討し、個別の指導計画に反映させていくことが大切です。

ウ 障害のある幼児などの保護者に対しては、その幼児の楽しんでいることや発達の様子、幼児自身の困っていることや願い、園での支援などをより細やかに伝えることが重要です。その際、先生はその幼児の一番の理解者であるという認識をもち、園での支援を必ず家庭でも行うように促していく姿勢が大切です。

エ 障害のある幼児などが「活動で何をすればいいのかが分からない」、「やりたくても物理的に入れなくて、皆と一緒に楽しめない」「そもそも興味や関心がわからない」といったことが、様々な次元で起こります。園は、大人の関わり方や指導、既存の保育環境・設備など、障害のある幼児などの周囲の様々な事項を変更・調整することが求められます。

オ 合理的配慮の決定に当たっては、保護者や専門機関との連携も重要です。特に、保護者との連携に当たっては、保護者の思いに十分に配慮しながら、まずは障害の有無に着目し、保護者のいわゆる障害受容を急ぐとともに、目の前で困っている幼児の障害の特性に応じた合理的配慮について共に考えることができる関係を築くことが大切です。

	ア	イ	ウ	エ	オ
1	○	×	○	○	×
2	×	○	○	×	○
3	×	×	×	×	○
4	○	○	×	×	×
5	×	○	×	○	×

- 9 次のア～エの各文のうち、「教育・保育施設等における事故防止及び事故発生時の対応のためのガイドライン【事故防止のための取組み】～施設・事業者向け～」(平成28年3月 内閣府 文部科学省 厚生労働省)、「教育・保育施設等における事故防止及び事故発生時の対応のためのガイドライン【事故発生時の対応】～施設・事業者、地方自治体共通～」(平成28年3月 内閣府 文部科学省 厚生労働省)に関する記述の内容として、正しいもののみをすべてあげているものはどれか。1～5から一つ選べ。

ア プール活動・水遊びを行う場合は、監視体制の空白が生じないように専ら監視を行う者とプール指導等を行う者を分けずに配置し、担当する職員等がその両方の役割を同時に担うようにする。

イ 子どもが、誤嚥につながる物(例：髪ゴムの飾り、キーホルダー、ビー玉や石など)を身につけている場合もあり、これらの除去については、保護者を含めた協力を求める。窒息の危険性があつた玩具やこれまでに窒息事例があるものと類似の形状の玩具等については、施設・事業所内で情報を共有し、除去することが望ましい。

ウ 教育・保育中の事故の場合、事故に遭つた子ども以外の子どもを事故が発生した場所と別の保育室等に移す。事故発生場所については、二次的な事故が発生する可能性があつたとしても、片付け、物の移動等の原状回復は行わない。

エ 子どもや保護者に対する安全教育にも取り組むことが望ましい。子どもの発達や能力に応じた方法で、子ども自身が安全や危険を認識すること、事故発生時の約束事や行動の仕方について理解させるよう努める。また、家庭における保護者の行動や教育により、子どもが安全な生活習慣を身に付けることができるよう保護者と連携を図る。

- | | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | ア | イ | |
| 2 | イ | エ | |
| 3 | ウ | エ | |
| 4 | ア | イ | ウ |
| 5 | イ | ウ | エ |

- 10 次のア～エの各文のうち、「学校において予防すべき感染症の解説」（令和5年度改訂 日本学校保健会）「Ⅲ 感染症各論」に関する記述の内容として、正しいものを○、誤っているものを×とした場合、正しい組合せはどれか。1～5から一つ選べ。

ア〔伝染性紅斑（りんご病）〕

かぜ様症状の後に、顔面、頬部に蝶のような形の紅斑がみられ、手足にはレース状の紅斑がみられる。ほほの真っ赤な発しんの状態から、りんご（りんごほっぺ）病とも呼ばれている。幼児や児童に好発する。

イ〔流行性耳下腺炎（おたふくかぜ）〕

耳下腺等の唾液腺が急に腫れてくることを特徴とする感染症である。秋から冬にかけて発生が多い。予防のためのワクチンはない。耳下腺、顎下腺又は舌下腺の腫脹が発現した後5日を経過し、かつ全身状態が良好になるまで出席停止とする。

ウ〔咽頭結膜熱〕

発熱、結膜炎、咽頭炎を主症状とする感染症である。水を介して感染する。夏期に多く、幼児や児童に好発する。ワクチンによる予防が可能。発熱、咽頭炎、結膜炎等の主要症状が消退した後2日を経過するまで出席停止とする。

エ〔マイコプラズマ感染症〕

咳を主症状とし、学童期以降の細菌性肺炎としては最も多い。夏から秋にかけて多く、家族内感染や再感染も多くみられる。咳、発熱、頭痛等のかぜ症状がゆっくりと進行し、特に咳は徐々に激しくなる。症状が改善し、全身状態の良い者は登校（園）可能である。

	ア	イ	ウ	エ
1	○	○	×	×
2	○	×	×	○
3	×	○	○	×
4	×	×	○	×
5	×	○	×	○

- Ⅱ 次のア～オの各文のうち、「学校における熱中症対策ガイドライン作成の手引き」（令和３年５月環境省・文部科学省）に関する記述の内容として、正しいもののみをすべてあげているものはどれか。
１～５から一つ選べ。

ア 熱中症の危険性を予測するための環境条件の指標に「暑さ指数（WBGT）」があります。暑さ指数（WBGT）は気温、気流、湿度、輻射熱を合わせたもので、暑さ指数（WBGT）計で測定します。

イ 熱中症の症状には、典型的な症状が存在しません。暑さの中にいて具体が悪くなった場合には、まず、熱中症を疑い、応急処置あるいは医療機関へ搬送するなどの措置を講じるようにします。

ウ 私たちの体内で本来必要な重要臓器への血流が皮膚表面へ移動すること、また大量に汗をかくことで体から水分や塩分（ナトリウムなど）が失われるなどの脱水状態になることに対して、体が適切に対処できなければ、筋肉のこむら返りや失神（いわゆる脳貧血：脳への血流が一時的に滞る現象）を起こします。そして、熱の産生と熱の放散とのバランスが崩れてしまえば、体温が急激に上昇します。このような状態が熱中症です。

エ 熱中症は、予防法を知っていれば、発生や悪化させることを防ぐことができます。日常生活における予防は、体温の上昇と脱水を抑えることが基本です。そのため、まず大切なのは、暑い環境下に長時間いることを避けることです。

オ プールでの活動時には、プールサイドが高温になりがちなことや水中においても発汗・脱水があることに留意し、他の体育活動時と同様に熱中症予防の観点をもった対応が求められます。

- | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| １ | イ | ウ | エ | | |
| ２ | イ | ウ | オ | | |
| ３ | ア | ウ | エ | オ | |
| ４ | イ | ウ | エ | オ | |
| ５ | ア | イ | ウ | エ | オ |

- 12 次のア～エの各文は、「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開」（令和3年2月 文部科学省）に関する記述の一部である。砂遊びで見られる「思考力、判断力、表現力等の基礎」に関する幼児の姿のイメージの例としてふさわしいものを選択したとき、正しいもののみをすべてあげているものはどれか。1～5から一つ選べ。

〈砂遊びでの幼稚園教育において育みたい資質・能力に関する、幼児の姿のイメージ〉

ア 遊びの中で気付いた砂の特性を使って、砂に水を加えて、山や池、お城や町などを試行錯誤しながら作り、表現する喜びを感じる。

イ 砂はシンプルな素材であることから、お皿に盛ればご飯、型抜きをしてケーキなど幼児は想像力を働かせて様々なものに見立てる。

ウ 友達と一緒に活動し、言葉を使って伝え合う中で、他の幼児の考えなどに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさを感じる。

エ 全身を砂まみれにして遊ぶ中で開放感を感じ、情緒が安定する。

- | | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 1 | ア | ウ | | |
| 2 | イ | エ | | |
| 3 | ア | イ | ウ | |
| 4 | イ | ウ | エ | |
| 5 | ア | イ | ウ | エ |

- 13 次の文章は、「幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開」（令和3年2月 文部科学省）の幼稚園と小学校の交流活動と交流活動終了後の幼稚園と小学校の教師の振り返りの記述の一部である。この活動の中での1年生と5歳児の子どもたちの学びを「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりとして捉えて振り返ったときに空欄（ A ）～（ D ）にふさわしいものをア～オから選んだ場合、最も適するものの組合せはどれか。1～5から一つ選べ。

〔当日の交流活動〕

この日は、小学校の正門に登園することになっていた月組。昨日はとても楽しみにしていたのに、いつもとは違うルートで登園してきたことと、初めての小学校訪問に少し緊張気味だった。正門で待っている担任や幼稚園の教師の顔を見ると、やっと笑顔が見られた。全員がそろったところで、並んで正門をくぐる。1年1組の児童たちが教室で待っていてくれた。

教室の後ろに並ぶ幼児を、児童が「3番の〇〇さん、こっちだよ」と順番にグループの番号と名前を呼んでくれた。最初は緊張気味だった幼児達が、名前を呼んでもらい、児童一人一人の顔が見えてくると、少し安心した様子がみられた。

席に着いたところで、予定どおりに自己紹介の時間を取った。しかし、教室の中に60名以上いたことから、様々な声が飛び交い、聞き取りにくかった。また、全般的に児童ははきはきと大きな声で名前を言うことができていたが、幼児は緊張で声が小さかった。

その後、小学校の教師から、「今日は4種類の飾りを小学生が幼稚園生に教えてあげてください」「小学生は幼稚園生に優しく接してあげましょう」「幼稚園生がトイレに行きたくなったら小学生と一緒に行ってあげましょう」等と細かく説明があった。

その指示のとおり、活動では、児童が一人一人の幼児にぴったりと寄り添って、丁寧に教えてくれる姿が見られ、幼児も落ち着いた雰囲気でき取り組むことができた。しかし、いつもなら自分でできることも、児童に任せてやってもらっている幼児の姿が見られた。幼児は、いつもと違う場で、一生懸命に教えてくれる今日会ったばかりの児童に対して「それできるから自分でやる！」とはなかなか言いにくいようであった。

児童が、幼児の願い事を短冊に書いてくれる活動もあった。幼児の中には願い事を大きな声で伝えられなかったり、言うこと自体を恥ずかしがったりする様子が見られたので、状況に応じて、幼稚園の教師が間に入って橋渡しをした。

活動の中で、小学校の教師から「きちんと4つの種類の飾りを作りましたか?」「トイレに行きたい幼稚園生はいないか聞いてあげてね」と確認があった。

幼稚園の教師は緊張気味の幼児の気持ちを代弁したり、落ち着かない様子の幼児に声を掛けたりしながら、困っていることはないか、児童に思いを伝えることができているかを見るようにした。また、児童の頑張っている姿などを見たときには認める声掛けをした。（後略）

[交流活動後の幼稚園と小学校の教師の振り返り]

議論が深まる中で、幼稚園の教師から、「幼児は、初めての交流会であり安心感をもって活動することに配慮してもらったことはとてもよかったが、困らないように、教師が先へ先へと指示を出してしまいがちだったのではないかな。もう少し幼児自身が考えて活動を進める余地があると、もっと自分たちでどのように違う立場の人と関わったらいいかを考える姿が見られるのではないかな（ A ）」、「もっと自分たちで、時間の使い方を考えたり、どの製作をするか等の活動を考え、見通しをもって行動できるのではないかな（ B ）」、「幼稚園の中では、泣いている3歳児の面倒をみたり、他学年が出しっ放しにした遊具を片付けたりしている姿も見られる。今回の交流活動では、全員が教えてもらう、やってもらうというお世話される側であり、自分たちで能動的に行動する姿や児童と一緒に目的に向かって取り組む姿があまり見られなかったのではないかな（ C ）（ D ）」、(中略)などの意見がありました。小学校の教師から、「幼児の中には1年生より製作が得意であったり、集団で何かをするときリーダーシップをとれたりする子がいることが今日の交流活動でよく分かった」、「校内で1年生が他学年と交流する際に、同じようなことを感じる。教えてあげる、教えてもらうという型にはまった関係にならないようにしたい」、「日頃はなかなか積極的に行動できないが、年下の幼児との活動の中で自信をもって行動している児童もいる（ C ）。また、年下の幼児に何かしてあげたいという気持ちから頑張ろうとする児童もいる（ A ）。1年生にとって、交流の意味はそこにあるのではないかな」などの意見がありました。(後略)

[幼児期の終わりまでに育ってほしい姿]

- ア 健康な心と体
- イ 自立心
- ウ 協同性
- エ 道徳心・規範意識の芽生え
- オ 社会生活との関わり

	A	B	C	D
1	イ	ア	エ	ウ
2	ウ	オ	イ	エ
3	ウ	イ	エ	オ
4	オ	イ	ア	エ
5	オ	ア	イ	ウ

- 14 次のア～エの各文のうち、「幼稚園教育要領解説」（平成30年2月 文部科学省）「第2章第2節 各領域に示す事項『人間関係』」に関する記述の内容として、正しいものを○、誤っているものを×とした場合、正しい組合せはどれか。1～5から一つ選べ。

ア 物を大切にするという気持ちの根底には、それが大切だと思える経験が重要である。また、次第にそれを自分も使いたい、友達も使いたいということで起こる衝突やいざこざ、葛藤などを体験する。そのような際、幼児は自分の要求と友達の要求に折り合いを付けたり、自分の要求を修正したりすることが難しいことから、教師が一方向的に順番を指示したり、機械的にじゃんけんで決めたりするなどのやり方で調整することが大切である。

イ 幼稚園生活には、生活上の様々なきまりがある。幼児は、集団生活や友達との遊びを通して、これらのきまりがあることに気づき、それに従って自分を抑制するなどの自己統制力を徐々に身に付けていく。しかし、なぜそのきまりが必要なのかが幼児には分からない場合もある。この場合、先生に言われたから、決まっているから、守らないとしかられるからという形できまりは守られるようになっていくこともある。一方で、きまりによってはなぜ守る必要があるのか、守らないとどうなるのかが幼児に容易に分かるものもある。

ウ 一人一人の幼児の発達する姿はそれぞれ異なっている。入園当初から安定して活動し始める幼児もいれば、居場所がなかなか見つからず教師のそばにいて安定する幼児もいる。また、友達と関わりを楽しむ幼児の傍らで、それをじっと見て過ごす幼児もいる。その場合、どのように関わるか戸惑ったり、見ていることで参加したつもりになったりして、心の中に自分の思いをため込んでいる状態もある。いずれも、今後、幼稚園生活を通して友達と共に過ごす喜びを味わうための大切な姿として、まず教師が受け入れることが大切である。

エ 幼児は、他者と関わる中で、自他の行動に対する様々な反応を得て、よい行動や悪い行動があることに気づき、幼児同士で善悪の基準をつくっていく。周りにいる大人がどう反応するかは重要ではなく、幼児はともに活動する幼児同士での諾否に基づいて善悪の枠をつくり、行動する。したがって、教師は幼児同士が何をしなければならなかったのか、その行動の何が悪かったのかを考えることができるような働き掛けをすることが必要である。

	ア	イ	ウ	エ
1	○	×	○	○
2	○	○	×	×
3	×	○	○	○
4	×	○	○	×
5	×	×	○	×

- 15 次の文章は、「幼稚園教育要領解説」（平成30年2月 文部科学省）「第2章第2節 各領域に示す事項『健康』」に示されている中の、「動線」に関する記述の一部である。下線部（ア）～（エ）について正しいものを○、誤っているものを×とした場合、正しい組合せはどれか。1～5から一つ選べ。

幼児は一般に意欲的に活動する存在であり、魅力的な環境に出会えば、生き生きとそれに関わる。

(ア) 室内の活動に偏り、戸外に関心を示さない傾向があるとすれば、戸外の環境の見直しをしなければならない。自然に触れ、その自然を感じながら伸び伸びと体を動かすことにより、体の諸機能の発達が促されることに留意し、幼児の興味や関心が戸外にも向くように、次の点から幼児の動線に配慮するようにすることが大切である。

第一に、幼児の遊びのイメージ、興味や関心の広がりに応じて行動範囲が広がることを考慮することである。例えば、室内でままごとをしている幼児がイメージの広がりとともに、「ピクニックに行こう」と戸外に出ていくことがある。この場合、戸外にもままごとのイメージを実現できるような空間や遊具が必要になろう。また、逆に、戸外での刺激を室内の活動に反映させることもある。

(イ) 室内と戸外が分断された活動の場としてではなく、幼児の中でつながる可能性があることに留意する必要がある。

第二に、園庭全体の空間や遊具の配置を幼児の自然な活動の流れに合わせるということである。戸外の活動に必要な環境としては、イメージを実現する面白さを味わおうとする幼児には遊びの拠点となるような空間や遊具が、友達とルールのある運動的な遊びを展開しようとする幼児には比較的広い空間が、木の葉や虫に触れて遊ぼうとする幼児にはその季節に応じた自然環境が必要である。

(ウ) 教師は、幼児が実現したいと思っていることを理解し、空間の在り方やそれに応じた遊具の配置を考えなければならない。

第三に、園庭は年齢の異なる幼児など多くの幼児が同じ場所で活動したり、交流したりする場であり、それぞれの幼児が安定して自分たちの活動を展開できるように園庭の使い方や遊具の配置の仕方を必要に応じて見直すことである。例えば、ルールのある活動に取り組む活発な5歳児の動線が、3歳児の砂場の水くみの動線と交差するような場合には危険を伴うので、幼稚園全体で園庭の使い方について話し合い、見直す必要があるだろう。室内環境に比して、戸外の環境は年間を通して同じ遊具が配置され、空間が固定的になっている傾向がある。しかし、(エ) 安全を確保した配置に見直されている場合は、幼児の興味や関心に即したものになるように配慮する必要はない。

	ア	イ	ウ	エ
1	○	○	○	×
2	×	○	×	○
3	×	×	○	×
4	×	○	○	○
5	○	×	×	○

- 16 次の記録は、「幼児理解に基づいた評価」（平成31年3月 文部科学省）「事例6 保育の記録から指導要録へ」の4歳児b児の日常の記録の一部である。記録から捉え直したb児の変容や特徴として空欄A～Dにあてはまるものをア～エから選んだ場合、最も適するものの組合せはどれか。
1～5から一つ選べ。

	b児の姿	教師の捉え
4月	進級当初は、年少の時に好んでいた滑り台や鉄棒などの固定遊具に一人で関わって過ごす。	
5月	新しく中型積み木が出ると興味をもち、b児と同じように興味をもっていたc児、d児と一緒に、中型積み木で「飛行機を作ろう」と言って、場をつくって遊び出す。飛行機も形にはなっていないが、それぞれがせっせと積み木を運んでいる。	年中児になって使えるようになった中型積み木に興味をもち、遊びたいという思いがある。 “飛行機”というイメージはもっていても“どのような”という具体的なイメージはまだ豊かではない。言葉のやり取りもまだ少ない。積み木の構成については安全な組み方について気付かせていくことが必要と思う。 年中組になって、新しい遊具に興味を示し、運動遊び以外にも興味をもって遊ぶようになる。
6月	c児、e児と一緒に砂遊びをしている。b児は大型スコップを見つけると、すぐに持ってきて「これで山を作ろう」と言う。 「トンネルがあるといいね」、「川につなげようよ」など、それぞれが思ったことを言いながら遊んでいる。 (中略)	c児とは、中型積み木を使って一緒に遊ぶことが多くなっていたため、つながりを感じているのではないか。砂遊びではイメージを膨らませ、自分が思ったことや考えたことなどを言葉に出しながら遊んでいた。友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じて楽しむようになってきている。友達とやり取りしながら一緒に遊ぶ楽しさを感じているので、その思いに共感していきたい。 A (中略)
10月	ひとりで、友達のしている転がしドッジボールを見ていたところ、「仲間に入っているよ」と友達に言われて、仲間に入る。しかし、みんなが夢中で遊ぶようになると、ボールはなかなか自分の手元にこない。つまらなくなっていて途中で抜けてしまう。	学級全体で経験したときに楽しさを味わい、自分もやりたい気持ちがある。しかし、普段関わりの少ない友達や大勢の友達の中に自分からは入れず、仲間入りしても思うように動けないことで気持ちが続かない。b児が友達と一緒に遊ぶ楽しさが感じられるよう、私も遊びに入りながら援助していきたい。
11月	今日も友達のしている転がしドッジボールを見ていて、「一緒にしようよ」と友達から誘われて、仲間に入る。次第に、自分から進んでボールを取りに行ったり、相手チームの友達を当てたりしながら、嬉しそうな表情で遊ぶようになる。	この日も興味をもって見ていたため、友達から誘われて嬉しかったと思われる。張り切って自分の力を発揮し、生き生きと楽しんでいた。相手にボールが当たった嬉しさや喜び、負けたときの悔しさなどをチームの仲間と共感し合うことで、友達と一緒に力を合わせて遊ぶ楽しさなどを感じたのではないか。 B

2月	子ども会の劇でワニの役になった。図鑑を見ながら同じ役の友達と「(ワニの絵は)難しいんだよ」、「どう描くの?」、「こうやって描くといいんじゃない」、「いいねえ」などと自分の考えを伝えながら、時間をかけてお面作りをする。 出来上がると、3人はすぐにお面をつけ、ワニになりきった動きをして遊び出していた。	これまでは苦手な描画だったが、友達と一緒にだったことで、頑張れたのではないかな。時間はかかったが、それだけに作った喜びは大きく嬉しかったようだ。友達からも認められ、嬉しさを感じていた。一緒に役の友達に考えを伝え、友達と一緒に表現活動をする楽しさを感じている。子供会に向けて意欲的に取り組んでいこうとしている気持ちを認め、頑張っていることやb児のよさを学級全体にも伝えていく。 C
3月	ドッジボールのボールの取り合いで、友達と言い合いになったが、自分の思いを言葉で伝え、b児も仲間から抜けずに最後まで遊ぶ。最後まで逃げ切った同じチームの女兒に「○○ちゃんは、(ボールに当たらないように)逃げるのがうまいんだよね」と声を掛け、同じチームの仲間と勝った喜びを味わっていた。	友達と一緒に遊ぶ楽しさや友達とのつながりを感じて、葛藤を乗り越えられるようになったのではないかな。友達のよさを見付けて、認めている言動を見逃さず、b児のよさとして認めていきたい。 D

ア 苦手なことにも粘り強く取り組もうとするようになる。友達とイメージを出し合いながら、いろいろな表現を楽しむようになる。

イ うまくいかないことも乗り越えながら、継続して遊びを楽しむようになる。友達のよさを認める言動が見られるようになる。

ウ 自分の力を発揮しながら、友達と一緒に遊ぶことを楽しむようになる。遊びを通して、学級のいろいろな友達との関わりを楽しんでいる。

エ 気の合う友達と一緒に遊ぶ中で、自分の思っていることや考えたことを言葉に出しながら遊ぶようになる。

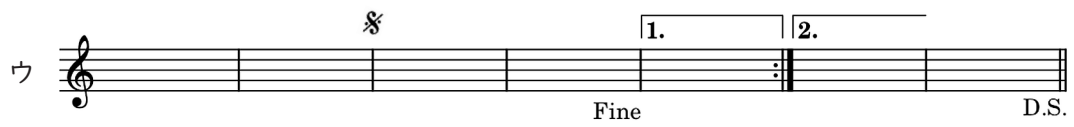
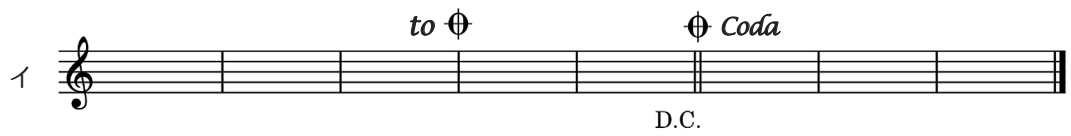
	A	B	C	D
1	ア	エ	イ	ウ
2	イ	ウ	ア	エ
3	ウ	イ	エ	ア
4	エ	ア	イ	ウ
5	エ	ウ	ア	イ

- 17 次の α 群に示すア～エの季節と、 β 群に示すA～Hの野菜や果物で、それぞれの季節に旬を迎える野菜や果物の組合せとして最も適するものはどれか。1～5から一つ選べ。

[α群] ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬	[β群] A ソラマメ B タケノコ C ダイコン D キュウリ E カキ F ハクサイ G トマト H サツマイモ
---	--

	ア	イ	ウ	エ
1	A	D	F	H
2	A	G	C	H
3	B	D	E	C
4	B	F	H	C
5	C	G	A	B

18 次に示す譜例ア～ウの総小節数として、正しい組合せはどれか。1～5から一つ選べ。



	ア	イ	ウ
1	13	10	11
2	13	10	13
3	15	10	13
4	15	11	11
5	15	11	13

- 19 次のア～オの各文のうち、造形活動に用いる材料や用具に関する内容として、正しいもののみをすべてあげているものはどれか。1～5から一つ選べ。

ア 油粘土は、乾燥しないため、いつでも何度でもくり返しつくることができます。紙粘土は、絵の具やインキを混ぜてカラー粘土にしたり、乾燥すると硬く固まるため、乾いた後に、絵の具で着色したりすることができます。

イ でんぷんのりは、指で適量すくい伸ばす使い方が一般的です。汚れた指を拭ける濡れ雑巾などを用意します。紙・木・布などの素材の接着に適した木工用接着剤は、乾くと白い乳液状であったものが透明または透明に近い乳白色に変化します。でんぷんのりも木工用接着剤もどちらも水で薄めて使用することができます。

ウ はさみは、右利き用と左利き用があり、子どもの手の大きさに合ったものや刃先がとがっているものを選ぶのがよいです。使い終わったら、刃の汚れを取ってから、刃を閉じてケースやカバーに入れて保管します。

エ ローラー遊びやステンシル版画に使用する版画インクには、油性のインクと水性のインクがあります。水性の版画インクは、油性の版画インクのように混色することはできませんが、黒以外にもカラフルな色があり、彩色を楽しむことができます。また、水性なので、水洗いができ、後始末が簡単です。

オ 油性マーカーは、耐光性、耐水性に優れていること、金属やプラスチックなどの素材に着色できることが特徴です。揮発性のため、使用する場合は、ある程度時間がたったら部屋の喚起を行うことが望ましいです。

- | | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 1 | ア | オ | | |
| 2 | ウ | エ | | |
| 3 | ア | イ | オ | |
| 4 | イ | ウ | エ | |
| 5 | ア | イ | エ | オ |

- 20 次のア～エの各文のうち、『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」（令和3年1月26日 中央教育審議会）に関する記述の内容として、正しいものを○、誤っているものを×とした場合、正しい組合せはどれか。1～5から一つ選べ。

ア 教職員が保護者や地域住民と協働して子供の育ちに関わっていく上で、子供の発達や学び、各園での実践の意図やねらいを保護者や地域住民に知ってもらうことは重要である。

イ 幼児教育施設では、言葉を通して行う教育を基本としていることから、言葉が子供の発達にとってどのような意味があるのかといった言葉の教育的価値について研究を積み重ねていくことが重要である。

ウ 幼児期から小学校への教育的なつながりを確保するためには、園長・校長のリーダーシップの下、幼児と児童の交流だけでなく、幼児教育施設と小学校の教職員が、両者の教育について理解を深め、また、両者が抱える教育上の課題を共有しておくことが重要であり、幼児教育施設と小学校の教職員の合同研修等の継続的な実施や、人事交流、相互の派遣研修等の推進が必要である。

エ 障害のある幼児等の将来的な自立と社会参加を見据えた一人一人の教育的ニーズを把握した早期発見・早期支援が重要であることから、幼児教育施設における特別支援教育の充実、それを支える関係機関・部局と連携した切れ目ない支援体制整備が求められている。

	ア	イ	ウ	エ
1	○	○	×	×
2	○	×	○	○
3	○	○	×	○
4	×	○	○	×
5	×	×	×	○

令和8年度大阪市公立学校教員採用選考テスト

第2次選考 筆答テスト(択一式)問題の正答について

幼稚園

解答 番号	正答 番号	解答 番号	正答 番号	解答 番号	正答 番号	解答 番号	正答 番号	解答 番号	正答 番号
1	3	11	5	21	1	31	－	41	－
2	2	12	3	22	－	32	－	42	－
3	4	13	5	23	－	33	－	43	－
4	1	14	4	24	－	34	－	44	－
5	4	15	1	25	－	35	－	45	－
6	4	16	5	26	－	36	－	46	－
7	1	17	3	27	－	37	－	47	－
8	5	18	5	28	－	38	－	48	－
9	2	19	3	29	－	39	－	49	－
10	2	20	2	30	－	40	－	50	－